

豊明希望チャペル礼拝

2024/4/14

「平安があるように」

ヨハネの福音書 20 : 19~23

ヨハネの福音書では、イースターの記事から教えられております。復活されたイエス様が最初に出会われたのは、マグダラのマリアでした。

そして、次に、イエス様は、ペテロやヨハネや、ほかの弟子達のところに行かれて、彼らに現れなさいます。その日、弟子達は、震えながら、ドアに鍵をかけて、こもっていました。それは、イエスのあとは、自分たちだと、思っていたからです。ユダヤ人たちは、あの弟子達も捕まえろと狙っている、そして、捕らえられ殺されるかもしれない。ドアという単語は、複数形ですが、ドアというドアに鍵をかけて、不安の中にいたのです。このように報告されます。

「20:19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちがいたところでは、ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた。すると、イエスが来て彼らの真ん中に立ち、こう言われた。「平安があなたがたにあるように。」」（黙想）

「夕方」とあります。復活の日の夜です。トマス(20:2)以外の弟子達が、マリアら、女性達と共にいました。イエス様は、鍵で閉められた戸をすり抜けて入ってこられたのです。そして、不安の中におびえている人たちのところに来られて、「平安あれ」と言って下さったのだとヨハネは報告します。強調されているのは、「平安があなたがたにあるように。」「平安あれ」と言われてイエス様が、入ってこれらと言うことです。これは、21 節で、それはもう一度繰り返されます。平安あれ。ここで、ヨハネは、私たちにとって、イエス様は死んでしまったように思えた、見えないように思えるけれど、いつも、私たちの必要を覚えて、その必要に的確に答えて下さる方ですと言っているのだと思います。ルカの福音書でも、復活されたイエスが二人の弟子に言われたのは、「平安あれ」(すこし違いますが・・・)でありました(ルカ 24:36)。

すなわち、不安なときに、平安あれと声をかけてくださり、また、誰にも会いたくないと閉じこもっているときに、私のほうから行けなくても、ときに一緒に旅をして下さり、ときに、心の閉じた鍵をあけて、あるいは、心の閉ざされたドアをやぶって、イエス様のほうから不安な私のところに来て下さるのだということです。そうして、シャローム、平安あれと、聖霊の不思議な平安、安心を与えて下さるのだということです。

ここにある「平安」のことばには、また、別の意味があります。それは、「ただの挨拶」という事です。彼らが震え上がっているところにやってこられて、言わば、聞き慣れた「こんばんは」(昼であれば「こんにちは」朝であれば「おはよう」と

言われて入ってこられたという事です。マタイの福音書でも、マグダラのマリアらに言われたのは、「おはよう」(マタイ 28:9)との挨拶であったと書かれています。マタイの福音書「28:9 すると見よ、イエスが「おはよう」と言って彼女たちの前に現れた。彼女たちは近寄ってその足を抱き、イエスを拝した。」ここでは、イエス様は、真正面から、私たちに向き合って、「そんなに不安でどうするんだ、信仰がないのか、聖霊の平安が来るのに・・・」と、叱咤激励(しったげきれい)したというより、なんでもない平安が静かな日常がそこにはあることを、確認するかのよう、声をかけられたのです。「何もあわてる必要はないよ、私はいつもここに、普通にいるよ」と、平安はいつもある、あなたがあわてふためいて、平安は失われていない。大丈夫だよと、主は、どのようなときにも、寄り添い、現れていて下さると言うことです。

次の聖句。「20:20 こう言って、イエスは手と脇腹を彼らに示された。弟子たちは主を見て喜んだ。20:21 イエスは再び彼らに言われた。「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」(黙想)

もう一度、イエス様は、平安を強調され繰り返されます。そして、ここでは、その平安が、幻想でも、思いつきでも、思い込みでもない、現実、平安が、今そこに、あることを、現実のイエス様のお姿をあえて見せることで、彼らに強調されたのです。「イエスは手と脇腹を彼らに示された」のです。脇腹を見せるためには、上を脱がなくてはなりません。あえて、ぬいで、槍に突かれて傷がある、その場所を見せられたというのです。そしてこうおっしゃられました。

「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」と。平安があるようにと、そして、その後(あと)に、こう言われました。「父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」と。

「遣わす」すなわち、この世に派遣すると言われました。私たちは思うのです・・・遣わすって・・・閉じこもっていて、こわくて、外に出られない、いわば、「ひきこもり」であるかのように閉じこもっていた私を遣わす、外に出て行けといわれるのですか?と聞きたくなるように、一足飛びです。そんなに昨日、今日のように、私は変わりません、この不安から、仮に、平安が来たからと言って、いきなり、たとえば、誰が命をねらっているかもわからない、このユダヤの、この世の真ん中に出て行くなんて出来るはずがないと思うのです。しかし、たしかに、イエス様はおっしゃれるのは、不安から、平安、そして、されには、出て行きなさい。その意味は、「派遣」であります。伝道であり、証しに出ていくというのです。

しかも、その伝道、その証の中身はこういうものだと言われます。

「20:22 こう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。20:23 あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦されます。赦さずに残すなら、そのまま残ります。」

まず、ここでわかるのは、私たちに与えられる「シャローム」は、約束をともなった、天来のシャローム、この地上では与えられない、恵みとしての平安だということなのです。

ヨハネの福音書「14:27 わたしはあなたがたに平安を残します。わたしの平安を与えます。わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。あなたがたは心を騒がせてはなりません。ひるんではなりません。」

その平安は、「わたしの平安」、すなわち、キリストの所有物である平安であり、聖霊の平安だということです。また、それは、罪の赦しとしての真の、魂の平安だということです。そしてここからです。特に 23 節に關係する事です。

その平安を与えると言うことは、罪をゆるし、魂を救う平安だと言う事です。どういう事でしょうか。じつは、これはえらいことです。どえらいことです。もう一度読みます。

「20:23 あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦されます。赦さずに残すなら、そのまま残ります。」

どえれー(名古屋弁)平安、どえらい平安だということがわかりますでしょうか？

字義通りみてください。私があの人をゆるすと、キリストも、その人の罪をゆるす、あなたがゆるさないなら、神を彼を罰するというほどの・・・あなたがほかの人に与える平安は、神が保証するような、愛であり、平安だということです。

わたし、ここ、字義通りに読むと、大変なことを言っているなあと思うのですよ。イエス様が、ペテロに言われた不思議な言葉があります。

マタイの福音書「16:19 わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。あなたが地上でつなぐことは天においてもつなぐれ、あなたが地上で解くことは天においても解かれます。」

これは、カトリック教会が、教会の鍵を持つ人、ペテロと、その後継者、教皇・・・？と言っているような特別なことなのか・・・と考えていましたが、ここで、イエス様は、ペテロを初めとして、ここにいた、あるいは、おそらく 100 人にも及ぶ弟子達に言われた約束であって、これを私たちに、書いているヨハネは、貴方たちもだと言っているとすれば、とんでもないシャロームの約束であり使命だと思うのです。

すなわち、神から天来の平安を与えられた私たちは、また、多くの人々に、神の平安、シャロームを与える存在にならねばならないということです。

別の言い方をすれば、私たちの証の言葉が、決定的な影響を人に与えるということです。しかもそれは、人が救われるかそうでないかを決定づける程の影響を与える言葉なのです。もちろん、正確には、罪を赦すのは、神様だけのことであり、私たちに出来ません。ただ、たとえば、私たちが、証しをするとき、目の前で、神の働きを見るとき、誤解を恐れずに言えば、神の天国かゲヘナかを、私たちに人々に証をしているとき、その神の選別を、私たちの目の前で見るということなのです。それほど、たしかな言葉をいただいて、私たちは御言葉を伝え、証をさせていただく、そういう力を与えられた証だということです。そういう意味では、伝道とはある種、覚悟を要することだと思えます。そのくらい、神が共にいて

下さって、まるでそこに神がいるように、事実、おられるわけですが、伝道させていただいている、あるいは、伝道しているとき、御言葉を語っているとき、みことばのパンフレットを渡しているとき、そこに、神が直接働いて下さると言うことです。

イエス様は、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。・・・」と。

聖霊の具体的な力を私たちの魂に、伝えられたことを意味します。

今日は、イースターを覚えながら、そのイースターの日におっしゃれたイエス様の、驚くべきシャロームの力、そして、そのシャロームの恵みに伴う、私たちの使命について教えられました。

私たちに、何が出来るだろうか。人の役に立てるだろうか。まして、魂の救いという証の業にどのくらい関われるだろうかと考えることがあります。

しかし、今日教えられていることは、復活の主が、死に打ち勝たれたご自身を、不安におびえる、弟子達に、貴方たちは不安である必要はない、貴方たちも勝利者だ、むしろ、勝利者である者は、積極的に出て行って、愛を伝え、まことの救いを伝えていかなければならないと教えられたのだと思います。

シャロームを与えるとされた主は、あなたも人々にシャロームを与えよと言われているのだと思います。

「私たちに、何が出来るだろうか。人の役に立てるだろうか。」と言いました。

歴史に影響を与えた偉人の名をあげるとき、あらためてイエス様の圧倒的な影響力の大きさを思うのです。「ソクラテスは 40 年人々に教え、プラトンは 50 年、アリストテレスは 40 年。ギリシャの賢人 3 人の活動 130 年。イエス様は、たった 3 年。なのに、歴史に与えたイエス様の影響力はそれよりも遥かに大きい。」と言った人がいます。その人はこうも言います。「イエス様は一枚も絵を書かなかった。しかし、イエス様の絵を描いた、ラファエロ、ミケランジェロ、ダビンチ、これらの偉大な絵かき達は、イエス様から多くの影響を受けてさらに多くの人達に影響力を与えた。イエス様は詩を一つも書いていないのに、ダンテ、ミルトン、多くの偉大な詩人達がイエス様を歌い、多くの人達に影響力を与えた。イエス様は、音楽を書かなかった。しかし、ハイドン、ヘンデル、ベートーベン、バッハ、メンデルスゾーン、多くの音楽の歴史に影響力を与えた彼らは全員、イエス様の影響力を受けている。偉大だと言われる人達はすべて、イエス様の影響力を受けていると。

シャロームの圧倒的な力は、私たちを立ち上がらせる具体的な力です。それは聖霊の力です。

今週の歩み。平安をあたえる、シャロームを与えるとされ、シャロームを与えよ、出て行って、人々に福音を伝えよと励まされていて下さる主に、励まされながら、ここから、感謝と賛美の歩み、さらには、証の歩みをさせていただく者として出ていきたいと願います。